二〇二〇年度

T 国語問題

注意

一　試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
二　解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。
　　HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
　　（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
三　この問題冊子は16ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
　　なお、問題番号は一～三となっています。
四　解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
五　解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
六　解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
七　この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

一　マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
二　一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
三　訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ ○ ● ○ ○ 1 2 3 4 5

（3と解答する場合）

一　「子どもにうったえる文章」（一九七七）と題された左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

与えられたこの題目は、私にはたいへんむずかしい。さまざまな面からむずかしい。

第一に、私には、はっきり答えることができないからである。第二に、子どもといっても、相手は三歳から十二歳くらいまでの子どもでは、能力も、物の考え方も別人のように変わってくる。

それぞれの子どもに、何が一ばんうったえかけるか、どう書いたら一ばんうったえかけるかを考えていると、(1)頭が千々に乱れてしまうけれども、日ごろ、私の家の文庫にくる子どもたちを観察していると、その大小の子どもたちの心の底に、何か共通なものが潜んでいるようにも思われてくる。今日の子どもたちは、ずいぶん早くからテレビその他の情報媒体にさらされていながら、はやりことばをその時どきに面白がり、そして、やがて忘れていっているようだが、そのようなはやりことばは別として、本来のことばというものを考えるとき、人生経験の浅い子どもたちにうったえかけるのは、ことばそのものというより、そのことばの意味する［　　］であるように思われる。

私の家の文庫の壁に、私たちは、時どき、よそから送られるパンフレット類から、子どもに興味ありそうな写真や絵を切りぬいて、はっておく。まだ新幹線が動きだすまえ、「夢の超特急」ということばが喧伝されていたころのことである。その汽車が、いかにも気もちよく走っているような予想図が雑誌に出ていて、その絵を私たちは壁にピンでとめておいた。すると、四歳の男の子が、文庫に足をふみ入れたとたん、「夢の超特急！」と叫んだ。その子が、ほかにも、いろいろなものの並んでいる部屋にはいった瞬間、小さいその絵を見つけだし、見つけると同時にありったけの声で叫んだことが、私を驚かせた。

「夢の超特急」というのは、むずかしいことばだから、この子には、考えてわかるということばではなかったろう。しかし、この子には、小学校初年のにいちゃんがいたから、やがて、この世にあらわれるすばらしい汽車

の話を聞かされていたにちがいない。だから、この子にとって、「ゆめのちょうとっきゅう」は、きっとスピードと力を形にしたものであったのだろうと、私は考えた。

「夢の超特急」のように造られて、やがて捨てられたことばは、長くは使われなくなったから、その後、その子の心にどんなあとを残したか、私には知る方法もないが、しかし、あのときのぱっと輝いたような、子どもの体全体の表情と叫び声を、私はいまでもおぼえていて、(2)一つのことばが子どもに強烈に働きかける実例として、よくこのときのことを思いだすのである。

このような小事件の重なりから、子どもに語りかけることばには、そのなかに物（人物もまじえて）と事（事件）が、いっぱいつまっていなければならないのだということを、私は、以前にもまして考えるようになった。おとなが自分ひとりで目読しているときには、そのことに気がつかないでしまう場合が、じつに多い。しかし、子どもを前にして、声にだして話したり、読んでやったりすると、一ぺんにわかってしまう。物（人物）が出てきて、たちまち事（事件）がはじまらなければ、(3)聞き手と語り手のあいだに張られた糸は、だらんとゆるんでしまうのである。その点、物と事のぎゅっとつまっているよい例が昔話で、グリムの話のなかなどには、子どもたちをぐんぐんひっぱっていく力のあるものが多く、驚かされる。

おもしろいのは、よく気をつけてみると、物と事のつまっている話には、形容詞が少ないということである。それでも、「大きなパン」とか、「年とった魔法使い」とかいうように、目に見える物についての形容詞は、わりあい多く出てくるが、「さびしい」とか、「かなしい」とかいうように、心情的な形容詞は非常に少ない。

大分まえ、よくＰＴＡのお母さんたちにお話しに出かけたころ、子どもの本の選択のことになると、私は、まだ自分自身よく納得のできないまま、自分の経験から、形容詞の多いお話は、子どもの心を打つ力が弱いものだという話をした。そして、また、情景描写も物語の進行をとどめてしまうから、子どもをたいくつさせるということをいった。

この描写ということについて、私はその後――たぶん、いまから四、五年まえ、たいへん興味ある経験をした。

私は、五、六人の子どもを前にして、新美南吉の「ごんぎつね」を読んでいた。物語のはじめのほうに、ごんというきつねが、川岸の草のかげから、川で魚をとっている兵十という男のようすをうかがっているところがある。腰のところまで水にひたりながら、あみをゆすっている兵十のほっぺたに萩の葉が一まい、ほくろのようにはりついている。

しかし、その葉っぱは、前後の事件とは何の関係もなく、物語は進んだ。そのとき、私は、聞いている子どもと私のあいだに、ふっと真空のようなすきまができた感じをうけた。あの葉っぱを、作者は何故につけたのだろう？これは、それからかなりながいこと、私の気にかかっていた問題であった。そしてまた、子どもに読んでやるまえ、私ひとりで「ごんぎつね」を目読したとき、私は、そのようにこの葉っぱから空なものをうけとらなかったのだから、いっそう気にかかったのである。

そのうち、あるとき、私は偶然、ラフカディオ・ハーン(注1)が、昔、帝大でした講義を読んで、衝撃(4)といってもいいほどの感銘をうけた。それは、ハーンが、アイスランドの伝説や北欧の近代作家の文章について講じた箇所であった。北欧伝説の文章は、鋭敏な視力と聴力をもって対象を把握し、誇張なしに――誇張は結局のところ、不正確につながり、原始的な生活を送ったひとたちにとっては、しばしば死をも招きかねなかったから――判断したひとたちによって書かれた文章で、そのために力に満ち満ちているのだと、ハーンはいっている。そして、その文章の第一の特長は形容詞のないことであった。ハーンの実例として挙げている伝説の一節は、英語でおよそ七百五十語あり、そのうち、形容詞は十ほどであった。

第二の特長は、一片の描写もないことだと、ハーンは説明してくれる。それにも拘らず、傷ついた勇士のかなしみ、その勇士のまわりに群がる人びとの顔つきさえ、読者の心に見えてくる。「りっぱな文章を書くのに、描写はいらない。描写は、詩にはけっこうである。しかし、こうした種類の、力強い散文にはいらない。」と、ハーンはいっている。

鋭敏な視力と聴力とで現実をつかむということばを、ハーンの講義のなかに見たとき、私はすぐ子どものこと

を考えた。いまの世の中で、鋭敏な視力と聴力をもって、自分たちの周囲の事物を観察しているものといえば、まず第一に子どもたちを挙げなければならないだろう。この子どもたちも大きくなれば、文明人になって、頭で物を考えるようになるだろう。しかし、子どもが子どもであるうちは、テレビも本も、(5)ほんとうに彼らの心を打つことばだけで語りかけることを心がけなければいけないのではないだろうかと、私は思った。

しかし、むずかしいのは、子どもに語りかける側の私たちが、すでに生命の力づよさを失い、子どもも今日のような、あまりにもあわただしい、移り変わりのはげしい世の中で、成長の過程で深い根をおろせない時代に育っていることだろう。けれども、子どもが子どもであるかぎり、生物学的に、子どもたちは力をもっている。その子どもに語りかけるとき、私たちは、もう一度、原始の生活をふりかえり、そこから再出発して、あまい語り口、または、おとなのひとりよがりは、大いに自戒しなければいけないのではないだろうか。

（石井桃子「子どもにうったえる文章」による）

（注）1　ラフカディオ・ハーン――小泉八雲。ギリシャ生まれのイギリス人で日本に帰化した文学者（一八五〇～一九〇四）。

問

(A)　――線部(1)について。その意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　意欲が減退する　　2　葛藤をおぼえる　　3　さまざまに迷う

4　思考が散漫になる　　5　細部に拘泥する

(B)　空欄 □ にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当なものを本文中から探し出し、三字で記せ。

(C)　――線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1　幼い子どもがまだ習っていない漢字熟語に知的好奇心を刺激される。

2　室内の色々な物の中から小さな切抜きに鋭く視線を向ける。
3　耳から入ったものから直接的にイメージを形成して理解する。
4　当時のはやりことばに敏感に反応して、仲間うちで使いこなす。
5　思考に頼らない感覚的な把握によって自由な空想を広げる。

(D)　――線部(3)について。似たような状況を述べている部分を含む一文を本文から探し出し、その初めの五字を記せ。(句読点や記号があれば、それも字数に含む)

(E)　――線部(4)について。筆者がハーンの講義から受け取ったものの説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
1　子どもを通じて筆者が経験的に感じていたことば観と対照的な事例への気づき。
2　子どもの生命力とことばの力との深いつながりに関する感覚を基盤とする理解。
3　子どもの成長や発達段階と文学の歴史や発展段階との間の共通性への認識。
4　子どもを引きつける文章の構造や機能における美的要素に対する再認識。
5　子どもと文学作品との間におけることばの使用法の違いと原因に関する新知見。

(F)　次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
イ　子どもがはやりことばを面白がるのは、子どもがことばによる描写に関心を持ちにくいことから説明できる。
ロ　子どものことばへの感受性は、子どもの年齢に無関係に事柄そのものの具体性に向けられる特徴がある。
ハ　自宅の文庫での活動により、文章を目読するのと朗読するのでは受け手への文章の伝達効果が異なることが判明した。
ニ　情景描写の多い文章に興味を感じるようになるのは、子どもが頭で物を考えられる文明人として成長してからである。

ホ　現代社会を生きる子どもは、原始社会の力強さを喪失しているからこそ、グリム童話にいっそう心ひかれる傾向を持つに至っている。

(G)　――――線部(5)について。筆者によれば、「ほんとうに彼らの心を打つことば」とは、どのような特徴を持つことばか。句読点とも三十字以上、四十字以内で説明せよ。

二　左の文章を読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

「蔵を改修して美術館にしたいのだけど」という話だったので、さっそく現地を見に行ったら、想像していた「蔵」のイメージとはおよそかけはなれていて、おかしかった。車を降りて、これが「蔵」ですと言われても、目の前にあるのはどう見たって、日本中どこにでもある増築に増築を重ねた「町工場」である。錆びたサイディング(注1)に、朽ちた下見張り(注2)の木に、歪んだシャッターのスラット(注3)。中に入ると確かに、もともとはしっかりとした土蔵だったんだ、と思えるコンセキ(イ)がところどころにある。電気の止った暗闇の向こうに、木造の大きな架構が微かに見えている。だけど残りの大半は、明らかに増築の安普請(1)だ。二階から降りる階段を目で追うと、踏段が途中で壁にぶちあたって終わっている。建物がそこでばっさりと切断されている。裏にまわってみると、階段ごと切断されたその傷口をトタンの波板が塞いでいた。

「蔵」と聞くと、もうそれだけでイメージがついてまわる。伝統とか、ゆったり流れる時間とか、沈殿(2)する重い空気とか。しかし考えてみれば、「蔵」とは「倉庫」にすぎない。保存のために、中の物が燃えないようにつくられた容器にすぎない。この「蔵」も、まず地区集落の役場として小さな木造二階建がつくられたことからはじまって、それが町村合併によってその機能が不要になったので農協に払い下げられ、ついで米の貯蔵用に土蔵が二軒建てられ、後に内部空間としてつながっているほうが便利なので一つの建物として一体化させられ、という経緯のなかで、つまり現実の「□」によって、徐々にかたちづくられてきた。

こういう空間は清々しく、軽い。イメージの投影がないからだ。イメージとは人間の心が世界に対して期待する「意味」である。人間はこれを求め過ぎる。勢い余って、その「意味」にあわせて現実の世界をつくろうとさえする。(3)そうしてできた空間は、ベタベタしていて暑苦しい。この「蔵」は逆である。そこが気に入った。

そういう「蔵」を美術館にしろと言う。そこで、私はイメージのことを考えることをまったくやめてしまって、目の前の世界をそのまま受け取り、それをどう変えたら美術館として機能するかを考え、結局、木造二階建も土

蔵も等価に残す案をつくってみたのだけど、「残すのは土蔵だけでいいんだ」と一笑に付され、そのうち肝腎の仕事の方は立ち消えになってしまった。

私たちが建物をつくるとき、まず最初に考えるのはそれが建つ環境だ。南はどちらの方向になるのか。どんな気象条件か。まわりは都市か、田圃か、森林か。隣には何がどんな風に建っているか。何がどちらの方向に見えるか。地形はどうなっているか。敷地のかたちはどんなか。現地を見に行ってまわりを歩きまわって、そういうもろもろの環境条件を体に覚えこませる。敷地を見なければ、設計をはじめられない。こういう環境条件が、建物のかたちを決める大きな根拠になる。たとえば、私はSという住宅をつくったけれど、それはすぐ目の前に海が広がっているのに、その手前に敷地に隣接して高速道路が走っていて、海に向かって開きたいけれど開くとつらい、という非常に特殊な環境条件があって、そこから構成がほとんど自動的に割り出された建物だった。（いちばん条件の悪い二階をつくるのをやめてしまった。）

私は、他の多くの人と同様に、建築とは自分の内側に発する恣意的な想念を形象化することではない、と思う。しかしだとすれば、じゃ建築とは何か、というこれまた大上段の問題が次に出てくるわけで、私はそれに正面から答えることもできなければ、また答えるつもりもないけれど、少なくとも設計の出発点としては、設計に先だって存在するこういう環境条件をまずまるごと受け入れる必要があるのではないか、と思っているのだ。

地形とか敷地のかたちとかいうことには、良いとか悪いとかいう「意味」が含まれていない。というか、「意味」を問わずに、ひたすら物質的世界として即物的に受け取れるものが、地形とか敷地のかたちなのである。そういうものを細かく分解し、それをチミツ(ロ)に組み立て直す。「意味」は問わない。問うと恣意的な想念が混入する。「蔵」の改装を考えていて、そうか、既存建物もそういう地形とか敷地のかたちと同じなんだ、と思った。既存建物にも本来は「意味」はない。「蔵」というものはなく、あるのは厚い土壁と凭れ掛かるひ弱な柱でつくられた現実の空間だけだ。それは本質的には、地形とか敷地のかたちと何も変わらない。

普通、リノベーションとか、再生とかいうときは、しかしその逆で、扱われているのは「意味」である。何を残し、何を刷新するか。同じくらい古くても、煉瓦の壁は残され、モルタルの壁は壊される。煉瓦には古き良き時代という「意味」がある。そういう「意味」があるかどうかが、保存か撤去かを決める。また「対比」の手法がよく使われる。煉瓦の重厚さに対してのワイヤーの軽快さ。過去と現代の対比。これも「意味」の操作である。扱われているのは記憶や時間だ。もちろん、こういう「意味」はモノの側になく人間の心の側にある。[4]人間の心を操作するためにモノが使われる。しかし、こういう「意味」の上塗りではなくて、全く別の改装がある。そんな予感がした。既存建物を地形とか敷地のかたちと同じと見る目は、つまり「意味」を見ない目である。単なる物質的世界として見る目である。そういう目で見る限り[5]改装はすでに改装でない。変えること、である。現にそこにある物質的世界に手を加え、そうすることで何かが変化する。ではどういう変形がよいのか。このことは、ひとつの建物をつくるときもまったく変わらない。与えられた敷地をどう変形させると、何がどう変化するのか。

建築を「つくる」という言い方が、そもそもシンドイ。無から有を生じせしめる。実に英雄的な行為だ。しかし、なぜ造物主よろしく、なにがなんでも「つくら」なければならないのか。目の前には、どんな場所にも豊かな物質的世界がある。それを並べ替え、組み替え、変形する。それで十分に私たちのまわりの物質的環境は変わる。それを「建築」と呼ぶ。それで良いじゃないか。「蔵」の改装を機にそんなことを考えた。

（青木淳『原っぱと遊園地』による）

（注）
1 サイディング――建物の外壁に張る仕上げ板材。
2 下見張り――建物の外壁として、板材を横向きに重ねながら張ること。
3 スラット――細長い横板の部分。

問

(A) ═══線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書で記すこと）

(B) ――線部(1)について。その意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 安く請負った仕事　2 普及した工法で建てた建物
3 単純に積み重ねただけのもの　4 容易にできる仕事
5 お金をかけず建てた粗末な建物

(C) ――線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 扉が長く閉じているため中の空気が湿気ていること。
2 思い出の詰まった物がたくさん保管されていること。
3 置かれた古い物に長年の埃が積み重なっていること。
4 明かりが乏しく、中の雰囲気が暗くなっていること。
5 長期間大きな変化もなく、停滞感が漂っていること。

(D) 空欄 □ にはどのような言葉を補ったらよいか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 姿　2 時　3 蔵　4 場　5 用

(E) ――線部(3)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 様々な意図を組み込み、多くの趣向が凝らされすぎた空間。
2 訪れる人々の熱気によって、気温と湿度が高くなった空間。
3 過剰にイメージを追求して、それが建築に投影された空間。
4 改装することで蔵の持つ多様なイメージが実現された空間。
5 建築家や依頼主の心の世界を現実の世界に転換した空間。

(F) ――線部(4)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 伝えたいメッセージを意図的に見せるように改築することで、建物を見る者の印象を方向づけること。
2 意味のない建物に特定の意味を注ぎ込むことによって、それを見る者に新しい意味を浸透させること。
3 人々の昔の記憶を引き出してその建築を気に入ってもらえるように、古いものを活用した建築をすること。
4 モノには歴史的な意味が内在しているので、モノを置き換えることで建物のイメージを変えること。
5 建築家が特定の意味を込めて改装しても、それを見る者はそこにさらに新しい意味を見出すこと。

(G) ――線部(5)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 改装とは、人間の心の思うように建物を的確に作り変えることであると言える。
2 改装とは、様々な物質を組み替えたり、変形させたりすることでしかない。
3 改装とは、既存の建物だけではなく、その周りの自然環境をも変えてしまうことである。
4 改装とは、人間が建物に与える意味を具現化することでしかない。
5 改装とは、既存の建物を自然環境に合わせて建て替えることに他ならない。

(H) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 依頼主がいう蔵をあえて町工場と考えて設計図を作成したら、その仕事はすぐに笑って断られてしまった。
ロ 自分の頭の中だけで考えたことを実現することは建築ではないということは多くの人に共有されている。
ハ 実際に建物を建てるためには、人間の持つイメージと物質世界の調和が必要である。
ニ 人々の記憶や時間感覚に訴える「意味」を込めて改装することが広く建築手法として採り入れられている。
ホ 既存の建物や自然環境を利用した建築の方が、それを利用しない新築の建物よりも優れていると言える。

三　左の文章は、『小夜衣』の一節で、兵部卿宮（宮）が宰相の君（宰相）の語った山里の姫君（大納言の姫君）に心惹かれて求愛の気持ちを抱いたことを受けて、宰相の君が二人の仲を取り持つべく、姫君を養育している尼上のもとを訪れる場面である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

宮は、宰相の語りし事のみ御心にかかりて、なべてならずと言ひしを、(1)見ではあらじ、とおぼしめす。心もだえ侍れば、ねんごろにのたまへるに、か(注1)の山里の老い人も、わづらふよし聞きしかば、とぶらひ聞こえんとておはしたり。

「朝夕も参らまほしく、心に離れず思ひやり聞こえながら、宮仕へのひまなさに、久しく参らで、見奉らぬほど経るも、いと心苦しく」など聞こえ給へば、尼上もうち泣きて、「老いのしるしには、見し人も恋しく思ひ聞こゆれど、おぼろけにては立ち寄り給はねば(a)、恨み聞こえてなん。このほどはまた、風邪(b)にや、乱れ心地あしくて、埋もれ臥して侍りながらも、老いのはてになりて、頼むべき人も侍らねば、惜しかるべき命ならねば、この世にとどまる心地も侍らねども、大納言の姫君、父(注2)は行方も知り給はず、(2)今日明日も知らぬ者に預け聞こえ給へるに、(3)うち捨て侍りなば、昔より憂きためしにも申し伝へたる、まこと(注3)ならぬあたりにまじらひ給はん事ばかりぞ、黄泉路のさはりともおぼえ侍る」と、泣きくどき給へば、宰相もうち泣きて、「あながち御心地の苦しくおぼしめせばとて、この世をそむき給ふ事は侍らねども、また明日を頼むまじき仮の宿りに侍れば、まして年老い給へる御心地には、さこそ行く末も短く心細くおぼさるるも、ことわりなり。姫君の御事、うち捨て給ひなば(c)、(4)誰かはあはれともおぼしはぐくむべき。父君も幼くより見馴れ給はぬ事なれば、(5)こまかなる事侍るまじ。うけたまはれば、『わが姫君をぞ、内裏(注4)へ参らせん』とて、(6)かしづき給ふなれ(d)。(7)この御事、とかくおぼしいとなまん事は、いとかたかるべし。ただ、(8)かくておはします時、はからひても、(9)さるべからんあたりへも許し聞こえ給へかし。いかにして聞こしめしけるにや、兵部卿の宮の、この御事をあながちに仰せらるれども、これ(注5)の御心も知りがたくて過ごしつるを、このほどとなりては、いたく責め給へるも心苦しきに、まことしき心ざしにもおはしまさば、さる

べき御さいはひに。(注6)いまだ心かくる人もなきに、よくねんごろに仰せらるるも、さるべき御契りにこそおはしますらめ。大納言殿聞き給ひたりとも、本意なきさまには思ひ給ふべしとも思はぬを」とて、(注7)いとかたじけなきを、(注8)とかく言ひわづらひて、帰りぬ。(e)‖

(注)
1 かの山里の老い人――尼上。山里の姫君の母方の祖母で、母亡き姫君を養育している。
2 父は行方も知り給はず――父大納言は姫君の将来もお考えにならず。
3 まことならぬあたりにまじらひ給はん事――姫君が血のつながらぬ継母（大納言の北の方）のもとで生活なさる事。
4 わが姫君――大納言の北の方の産んだ姫君。
5 これの御心――こちらの尼上側の御意向。
6 いまだ心かくる人もなきに――山里の姫君にはまだ心を寄せて求愛してくる殿方もいないところに。
7 いとかたじけなきを――兵部卿宮との縁談はたいそうもったいないくらいの話なのだが。
8 とかく言ひわづらひて――あれこれとうまく説得できず、色よい返事をもらえずに。

問

(A) ――線部(1)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 見なければ死んでしまう　2 一見の価値はあるだろう
3 つい姿を想像してしまう　4 見飽きることはないだろう
5 結婚しないではいられない

(B) ――線部(2)「今日明日も知らぬ者」とは誰のことか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 兵部卿宮　2 宰相の君　3 尼上　4 山里の姫君　5 大納言

(C) ――線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 私が姫君の世話を放棄しましたならば　2 私が姫君を残して死にましたならば

3 姫君が私を置き去りにしましたならば　4 大納言が姫君を見捨てましたならば

5 大納言が私と姫君を冷遇しましたならば

(D) ――線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 誰かが姫君を憐れんで世話をするでしょう　2 誰もが姫君を気の毒がって庇護するでしょう

3 誰も心を込めて姫君の世話などしないでしょう　4 誰かが姫君を気にかけて見守るべきでしょう

5 誰かが姫君を愛しいと思って妻とするでしょう

(E) ――線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 細部の記憶はないでしょう　2 少しの愛情もないでしょう

3 些細なことは気にしないでしょう　4 こまやかな心配りはないでしょう

5 細心の注意を払うべきでしょう

(F) ――線部(6)の現代語訳を八字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(G) ――線部(7)「この御事」の指し示す内容として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 山里の姫君の世話　2 山里の姫君の入内

3 北の方の産んだ姫君の世話　4 北の方の産んだ姫君の入内

5 尼上の死後の法要

(H) ――線部(8)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 山里の姫君が未婚でいるうちに　2 北の方の産んだ姫君の入内より先に

3 山里の姫君が尼上の手元にあるうちに　4 山里の姫君を継母に取られる前に

5 尼上が健在であるうちに

(I) ――線部(9)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 それほど恨んでいるわけでもない大納言家と仲直りなさいませ

2 しかるべき時期に姫君を手放して継母の手に委ねなさいませ

3 ふさわしい殿方との結婚を考えなさいませ

4 たいして身分が高くない人であっても姫君を差し上げなさいませ

5 結ばれるべき運命だと思って結婚を許してあげなさいませ

(J) ═══線部(a)〜(e)の文法上の意味として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 打消　2 完了　3 断定　4 伝聞推定　5 推量

(K) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 兵部卿宮が山里の姫君への仲介を宰相の君に頼むと、宰相の君はすぐさま山里の尼上のもとへ話をしに行ってくれた。

ロ 尼上は、年老いたので昔の知り合いに会いたいのに、よほどのことがなければ見舞いに来てくれないと恨み言を述べた。

ハ 尼上は、自分の死後、大納言とその北の方が山里の姫君を引き取ってきちんと世話をしてくれるだろうと思っている。

ニ 宰相の君は、事の成り行きを見て、兵部卿宮と山里の姫君とは結ばれるべき前世からの因縁があったのだろうと語った。

ホ 大納言は山里の姫君と兵部卿宮との縁談について反対するだろうから、内緒で結婚させればいいと宰相の君は思っている。